

朝顔の種が一粒

下江順子

広島県・二九・家庭教師

あなたに初めて会ったのは、私が、小学校三年生の冬休み。

初めて、一人つきりで、電車に乗って、おばあちゃんのお家に遊びに行った日。

お母さんと一緒に行ってた時と同じように、座席に座った瞬間は、自分自身がとても大きくなったような気分で、小さな胸が、風船のように大きくなっていったのよ。

電車の中は、満員で、つりかわが、ユーラユラりと、ゆれるのを見てみると、良い気分であんなに眠ってしまったの。

ウツラウツラとした時、目の前に、おばあさんが立ったので、いつもお母さんがしていたように、私は立ち上がったの。

すると、太ったおばあさんが、座ってしまい、私は、とっても悲しくなって、ワーワー泣きだしてしまっただの。

「ビービーと、うるさいガキねエ。親はどこ？ まったく」

と言って、私の副将のついた胸を、思いつきり、その太ったおばあさんがはたいたの。

その時、同じ年位の男の子、そう、あなたが私のところによってきて、手のひらに、何かをにぎらせて、小さな声でささやいたね。

「オイ、チビ！ お前を「太陽応援団員」にしたるから、もう泣くな」

それから、太ったおばあさんに、「この子はなあ、おばあさんに席をゆずったんやでエ」と言ってくれたよ。

すると、となりに座っていたおじさんが立ち上がってくれて、あなたは、その人にも、何かを握らせていたね。

駅のホームに降りてから、そーっと、手をひらいてみると、朝顔の種が一粒。

それを見た時私は、花を咲かせる土になりたい。誰かの心に、その花の種を植えられたら、水をかけられたらいいと思ったの。この強い想いを私にくれたあなたは、私の初恋の人。

あなたは、今でも種をくばっているのでしょうかね。私も、がんばるよ。